

管理的立場の経験から中退予防・ 不登校に取り組んで



2013.10.22

山梨英和大学 副学長・教授
窪内 節子

1

大学管理上の課題 －「生きづらい」学生への支援

2002年の全国調査(対象公立小・中)：

在籍する児童・生徒のうち約6.2%が「知的な遅れはないが、学習面、行動面で著しい困難を示す」と教師が判断した。

半数は大学進学と考えると困難を抱える学生が2～3%は在籍、それらの学生への支援は大学の急務の課題

2



「生きづらい」学生とは (ASD)の学生の特徴

- DSM-5では、重度の知的障害を持ち、言葉を発することのない人から、こだわりがあるものの就職して穏やかに自立生活が可能な人まで、全てを包含させて、自閉症スペクトラム障害(ASD)という用語に統一した。
 - ➡ 学内に多くいる初めはいいが閉じこもってしまう、授業や集団の場が居づらい、「通じなさ」、「違和感」、「関係が深まらない」など
- 中退予備軍や不登校の学生に多い

3



自閉症スペクトラム障害とは

- Wing L.が提唱した「スペクトラム」とは連続体を意味し、様々なバリエーションがあるものの、本質的には1つと考えた。
- 「自閉症スペクトラム」の診断は、
 - ①相互社会性の障害 (対人関係に問題)
 - ②コミュニケーション障害
 - ③想像力の障害 (情報の統合や推論が困難)の3点

4

これからの学生相談

いわゆる生きづらい学生(中退予備軍・発達障害を含む)への対応は、新たな学生相談モデルとなる。(高石 2009参照)

➡ 高等教育に学生相談担当者による
特別支援授業が創設されるだろう

↑
窪内が追い求めてきた「原初的な気持のむすびつき」という概念が上記のような学生とのコミュニケーションに有効だと考えた。

5

大学生との関わりから学んだことを ヒントに学位論文にまとめる

- ・心理療法では、セラピストとクライアントとの関係形成が基本となる。その関係を「**原初的な気持のむすびつき**」(primitive emotional ties)と名づけ、言葉の背後にある隠された気持を、母親と乳児間の通じ合いのように汲み取り合う関係とした。
- ・アイデンティティ拡散の学生との関わりから
→自分を作る、アイデンティティ形成プロセスに興味、自我意識をはぐくむセラピスト-クライアント関係(自我意識形成プロセスと命名)に注目し、その関係について考察した。

6

ASD学生への支援

ASDは、外界の刺激に恐怖を抱き易く、母親に甘えたくとも甘えられないという「アンビバレンス」のために、母子一体感や基本的信頼が育たず、言語を習得したとしても情緒的交流は困難。



その支援は、治療者が原初的次元で子供と関係を結ぶことで、アンビバレンスを緩和していくこと。(小林 2010)

つまり、「**原初的な気持のむすびつき**」
(primitive emotional ties) の構築

7

大学での特別支援教育の試み

山梨英和大学



山梨英和大学

山梨県甲府市横根町888

人間文化学部
人間文化学科

学生数 1,000名
募集人員 250名



8

大学での特別支援教育の試み

山梨英和大学



1年次 初年次教育を展開, 専門への導入	心理臨床コース
2年次 キャリアデザインを 立て, コースを選択	心理社会コース
3年次 専門を学びながら, 自分の強みを磨く	情報システムコース
4年次 集大成となる卒業 研究に取り組む	ビジネス・コミュニケーションコース
	英語・英語圏文化コース
	日本語・日本文化コース
	総合人間文化コース

9

大学での特別支援教育の試み

2013年3月：1年生必修の基礎ゼミが不合格の学生が18名いた。急遽再履修者だけのクラスを創設し、窪内が担当。ほぼ全員が中退予備群で不登校学生。

登録前から連絡を始め、登録者は14名。

登録者の内訳

留学生 3名 (日本語困難)

メンタル問題 2名 ASD 7名

PTSD 1名 経済問題 1名



非言語的コミュニケーションを重視した 心と状況に合わせた柔軟な指導

留意点

- ①最大限察知能力を活用して、学生のニーズを読む。思考の癖、対人関係のパターン、感覚過敏や認知の特徴を知る。
- ②個々のペースは違っても変わり得る存在として、非言語的コミュニケーションを重視し、関係形成に努める。
- ③学生が楽しく、その人らしく居られるよう配慮しつつ、枠にとらわれない複眼的理解を持つ。
- ④個別面接ではなく、集団指導であることを考え、内省や内面理解を求めることを強要しない。
- ⑤分かりやすい評価、出席表を明示し、出席を促す。

11



支援クラス担当のための考察

1. 功を奏した逆転の発想：ASDの学生だけを対象にしなくても一番の基礎になるクラスの再履修者は、「生きづらい」学生であることは間違いなかった。
2. 大学における特別支援教育クラス設置は、ASD支援が全学的なものに広がる。
3. 担当教員を支えるスタッフの必要性：学生への携帯電話やメールによる連絡や家庭訪問も必要なため学生部、学生相談室、TAとの連携が必要。
4. 互いが知り合う関係性の構築が重要：授業中努めて学生にとって学業上困難なことを話題に取り上げた。同じ困難さを持つ一体感が生まれた。

12

最後に

今、教育臨床に求められていることは、
助けることだけでなく、彼らの生きていく
すべてを育てること。

そのために学生相談担当者は、大学教育全体
を視野に入れて、様々な援助を試みて
いくことが必要だと思う。

ご清聴有難うございました。

